

学習者による体験談の協同的『構造』 —ホームビジットにおける接触場面の会話から—

鈴木 伸子

1. はじめに

筆者はかつて、接触場面では学習者が日本の社会・文化的事項に関する質問をし、日本人側が答えるという応答パターンが頻繁に現れることを利用し、「ホームビジット」という学習活動を実施したことがある。これは、日本の社会や文化をテーマにしたプロジェクトワークに取り組む学習者が、インタビュー調査のために日本人協力者宅を訪れるというものであった（詳細は鈴木 2004a 及び 2004b 参照）。

この訪問中、質問に対する回答として、もしくは自発的な発話として、日本人協力者・学習者の双方から個人的な体験談がいくつか語られた。従来、母語による体験談には一定の構造があると指摘されてきたが（Labov 1972, Peterson and McCabe 1983 ほか）、第二言語で語られた体験談の談話的な構造はどのようなになっているのだろうか。本研究では、Labov（1972）によって見出された第一言語による体験談の標準パターン構造をふまえ、日本語学習者の第二言語による体験談の構造と、接触場面のコミュニケーションにおいて個人の体験談が果たす役割の一端について解明を試みる。

2. 先行研究

アフリカ系アメリカ人の体験談に一定の構造があることを見出したのは Labov（1972）である。彼によると、十分に形の整った体験談では、冒頭から「要旨 abstract」「設定・方向づけ orientation」「出来事 complicating action」「評価 evaluation」「結果 result or resolution」「結語 coda」の順に、6 つのカテゴリー¹が現れるという（Labov et al 1967, Labov 1972）。体験談によっては、6 つ全てを備えていない場合もあるが、それでも「設定・方向づけ orientation」→「出来事 complicating action」→「評価 evaluation」の三つとその順番は、あらゆる体験談に含まれており、体験談の標準的な構造だという。一方、英語母語話者の子どもを対象に、体験談の構造の発達プロ

セスを研究した Peterson and McCabe（1983）や、同様に日本語母語話者の子どもを対象にしたのが Minami（2001）では、子どもたちの体験談はいずれも年齢が上がるにつれて前述した標準的な構造パターンに集中することが示された。このように、体験談の標準的な構造は成人に関しては文化横断的傾向が見られるものの、先行研究はいずれも第一言語による体験談が対象のため、第二言語による体験談および接触場面における体験談については新たな研究が必要と思われる。

3. リサーチクエスト

接触場面における学習者の体験談の構造を、第一言語による体験談の標準パターン「（要旨—導入部）—設定:ORT—出来事:ACT—評価:EVL—（結果—結語）」（Labov 1972）と比較した場合、いかなる特徴が見られるか。

4. 本研究のデータと分析方法

4.1 データの概要

都内の四年制大学に通う短期留学生（中上級学習者）10 名²が、二人一組で日本人宅を訪れたホームビジットの席上で語られた、学習者による体験談 6 つ、日本人協力者による体験談 5 つ、計 11 話の体験談。なお、本研究における体験談とは、Labov（1972）に倣い、「時間的に異なる 2 点、もしくはそれ以上の点から成り立っており、実際に起きた事件（過去の経験）をその事件の起きた時間的経過・順序に従って言語表現すること」と定義する（同：pp360-361³）。その上で、二つ以上含まれた時点のうち、最初の時点における説明の開始部分から（よびかけ等を含む）最終時点の描写や話し手自身のコメントが終了する部分までを、ひと続きの体験談と捉えて分析対象とする。

4.2 分析方法

本研究では、行（verse）／連（stanza）分析とい

う談話構造の分析に、Labov の流れを汲む体験談の談話機能の分析を統合した、南 (1999) 及び Minami (2002) の分析方法を用いる。

まず、発話を分析単位に分節するために行／連分析を行う。この手法は Hymes (1981)、Gee (1986)、Minami (2002) が体験談の構造分析に用いたもので、体験談は小さい順に<細行:line—行:verse—連:stanza—項:section—項:apex>という階層を成すと考え、それを話し手がどう区切っていくかを音素的要素や意味・構造を手がかりに階層序列化するものである。例えば、南 (1999) は、子どもの体験談で「あのね、スピードだしてたらね／ころんでね／ハンドル曲がってね」という具合に行／連分析を行った。冒頭の「あのね」と「スピードだしてたらね」

はいずれも細行である。南は「この発話で分かるように一つの発話というのは、最小単位が細行で、細行が集まって『／』で区切られた行になり、行が集まって連になるわけである」と説明した (同: p167)。

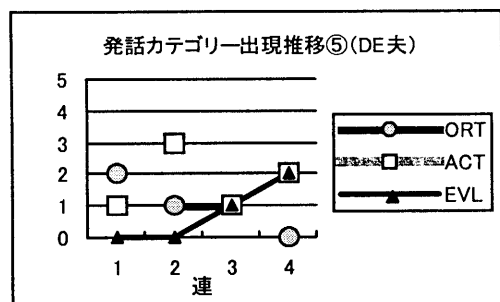
体験談をこのように階層別に分節した後、行ごとにカテゴリーを付す⁴。例えば先ほどの子どもの体験談の場合「あのね、スピードだしてたらね」→設定:ORT、「ころんでね」→出来事:ACT となる (同: p165)。分類に使用したカテゴリーは以下表 1 の通りで、Labov (1972)、Peterson&McCabe (1983) に、日本語の特徴を加味して定義した Minami のカテゴリー (Minami2001: pp83-87) を使用した。

【表 1】日本語の体験談のための談話機能分析カテゴリー

出来事／Action: ACT	過去に起きた事件は具体的に何なのか。
設定・方向づけ／Orientation: ORT	誰が、いつ、どこで、何をしたか。その他、場面状況・周囲の様子・進行中の行為の状態など。
評価／Evaluation: EVL	話し手の気持ちや、話の意味は何なのかを聞き手に伝える。
付加／Appendages: APP 要旨・導入部／ABS 注意喚起／ATT 結語・終結部／COD	語りの冒頭もしくは終了部分に現れる。以下 3 つのサブカテゴリーがある。①Abstract: ABS (冒頭に現れる要約) ②Attention getting devices: ATT (聞き手の注意を引きつける発話。「ボク知ってるよ」など) ③Coda: COD (最終部分で終わりを宣言する発話。「おしまい」「もう、ない」など)
直接引用／Reported speech: RPT RPT(EXP) RPT(IMP)	体験談の中で、登場人物が話した内容の直接引用。「って」という引用表現が明示される場合と、省略される場合がある。前者は RPT (EXP)、後者は RPT (IMP) と表示する。なお、本研究では心内発話もこのカテゴリーに含める。
心理的補足／Psychological complement: COM	話し手の意見、曖昧さ、ビリーフ、印象などを表す発話。「日本語に特徴的な表現で、「思う」「気がする」「分かる」「覚えている」「一みたい (だ)」などの動詞的要素が後続する。
結果／Outcome: OUT	特定の出来事・行為の結果。

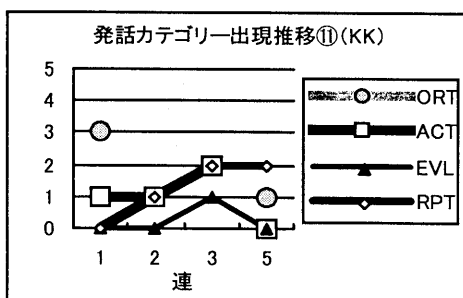
5. 分析

まず、日本人協力者の体験談五つを対象に、前述した構造分析と、カテゴリーを用いた発話機能分析を行い、連ごとに、どのカテゴリーがいくつ登場したかを集計した。その際、標準パターン構造を形成する三カテゴリー (設定:ORT—出来事:ACT—評価:EVL) を抽出して集計し、体験談の展開とともにどのように各カテゴリーの総数が連ごとに推移するかをグラフに示した。すると、次の発話カテゴリー出現推移⑤のグラフに最も典型的に見られるように、体験談の冒頭部には設定が集中し、次いで中盤には出来事が最も多く登場し、最終部分には評価が



最多となる体験談が多かった。これは、先行研究で示された標準パターンと概ね同じ構造の展開である。

一方、学習者の体験談六つについても同様に発話
 カテゴリー分析を行い、グラフ化したところ、特に
 終結部分で異なる特徴が見られた（その典型例が次
 の発話カテゴリー出現推移⑪のグラフである）。即



ち、評価 EVL が終盤に至ってもさほど頻出しない
 点である。また、注目した三カテゴリー以外にも、
 日本人協力者があまり使用しなかった直接引用の使
 用頻度が高く、特に終結部分で頻繁に登場している
 ことが分かった。

そこで、各体験談の実際の出発に立ち戻って文
 脈・カテゴリー・機能を、相互行為の中で検証して
 みると、学習者の体験談の場合、終結部に評価が現
 われないのではなく、発話者自身による評価が付与
 されていない、ということがわかった。では、そこ
 には標準パターン以外の構造があるのだろうか。

■会話例 1 (学習者 KK の体験談・最終連)

日本人協力者	カテゴリー	学習者 KK
< は は は は > {>}	ORT	うん でも両親には、 ははは [笑い] ああ、「友だちときさ てんに < 行き >
	RPT(EXP)	{<}
		ただ雑談するだけ」
	RPT(EXP)	と言った

ここに挙げた最終連で、学習者は二つの引用
 RPT を使用し、体験談を締めくくっている。話し
 手の主観や感情を表す評価 EVL は使用されないが、
 引用 RPT によって自己の言葉をそのまま繰り返す
 ことで、自らの体験を再現ドラマのように表現し、
 聞き手に疑似体験をしてもらって共感を引き出そう
 としている。この引用に対して、聞き手である日本

人協力者一家からは笑いが溢れ、語られなかった
 KK の主観が適切に理解されたことがわかる。一見、
 体験談の標準パターンからは外れているかのように
 思えるが、実際には引用 RPT が聞き手の理解を経
 て「笑い」という一種の評価が付与されて体験談全
 体が標準パターンに準ずる構造を形成している。

■会話例 2 (学習者 JH の体験談・最終連)

日本人協力者	カテゴリー	学習者 JH
夫：ああ、あ そこでね。 夫：難しいで すよねー。	ORT	そこで、5 分くら い：：
	ACT	また待って [笑いなが ら]
	OUT:ACT	それに乗りました。 [笑いながら]
		はい

この会話例の最終連では、評価 EVL も、引用
 RPT も現れないが、聞き手の AY 夫によって「難し
 いですよー」という評価が加えられている。本来
 であれば、学習者 JH 自身が評価 EVL を提示して
 体験談を終えるところであるが、聞き手側が話し手
 に成り代わって評価を付け加えたのである。この評
 価 EVL が話し手と一致していたことは、学習者の
 「はい」という同意が現れたことから明らかであ
 る。学習者 JH の体験談は、日本人協力者 AY 夫
 との相互行為によって共同構築され、結果的に体験
 談の標準パターンに準じる構造が形成された。

6. まとめと今後の課題

本研究では、ホームビジットにおける日本人協力
 者と学習者による体験談を対象に、その体験談の構
 造の構築プロセスを分析した。まず、話し手の発話
 にのみ注目して Minami (2001) のカテゴリーを
 使用した発話機能分析を行ったところ、日本人協力
 者による体験談は Labov が指摘した標準的な体験
 談の構造パターンの特徴が強く見られ、一方、学習
 者の体験談に関しては、同様の特徴が明確に現れな
 かった。

しかし、体験談は相互行為を経て生成されるとい
 う視点から、話し手・聞き手双方の発話を視野に入

れて質的な分析を行ったところ、終結部に評価の増加しない学習者の体験談にも、二種類の相互行為的な方法で評価 EVL もしくは評価 EVL に相当する要素が付与されており、その結果、やはり標準パターンの体験談が構築されていることがわかった。即ち、①直接引用による発話を媒介にして、聞き手側に自分と同じ評価の想起を期待する。②聞き手が話し手に代わって評価にあたる発話を加える、以上二つの方法である。

本研究で取り扱ったデータ数は少なく、今回の分析結果も、学習者の接触場面における体験談の構造が、母語場面の体験談とは異なる可能性を示唆したに過ぎない。今後は対象データ数を増やして、更に検証を続けていきたい。

注

1. 各カテゴリーの日本語訳は南(2001)より。
2. 参加者の国籍・日本語レベルの測定結果など更に詳しい情報は鈴木(2004b)を参照されたい。
3. 各カテゴリーの日本語訳は南(2001:162)より。
4. 分類にあたっては、筆者ともう一名の評定者として別個に作業を行い、両名の一致率を算出したところ、75%～96%、平均で 88%であった。その後、一致率90 になるまで独立に作業を重ねた。

参考文献

- 鈴木伸子 (2004a) 「留学生に対する日本人協力者の個人化した説明が談話の展開に与える影響」『リテラシーズ—ことば・文化・社会の日本語教育へ』1 巻1 号
くろしお出版 2004 年2 月25 日 web 配信
<http://kurosio.mine.nu/21web/web01.html> (※2005 年4 月1 日現在)
- 鈴木伸子 (2004b) 「日本事情クラスにおける家庭訪問プログラムの試み」『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』第7 号 pp209-225 国際交流基金
- 南雅彦 (1999) 「ナラティブにおける普遍性と文化的固有性—個人的経験物語における視点と心理的枠組み」
南雅彦・アラム佐々木幸子編 『言語学と日本語教育Ⅱ』 pp161-180 くろしお出版
- Gee, J. P. (1986) Units in the Production of Narrative Discourse. *Discourse Processes*. 9, pp391-422.
- Labov, W. (1972) *Language in the inner city*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- Minami, M. (2002) *Cultural-specific Language Styles: The Development of Oral Narrative and Literacy*. Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- Peterson, C. and McCabe, A. (1983) *Developmental Psycholinguistics: Three Ways of Looking at a Child's Narratives*. New York: Plenum Press.

すずき のぶこ／お茶の水女子大学大学院 応用日本言語論講座
qwb01203@nifty.com